２０１５／１１／０８　　礼拝メッセージ　　近藤修司　牧師

主　　題：七つのラッパが吹かれる２
聖書箇所：ヨハネの黙示録　９章１－１２節

どうぞヨハネの黙示録９章をお開きください。
もう既に私たちは四人の御使いがラッパを吹き鳴らしたことを見て来ました。神様のさばきが下るわけです。そしてその四つのラッパが吹き鳴らされた後、しばらく静寂が続きました。大変不気味な静寂です。一羽のわしが中天を飛びながら大声で叫んでいました。「**わざわいが来る。わざわいが、わざわいが来る。**」と。これまでのわざわいよりも、これまでのさばきよりもはるかに恐ろしい、厳しいさばきが訪れることを告げていたわけです。

Ａ．神のさばき　１節

そして遂に第５番目のラッパが吹き鳴らされます。第五の御使いによってラッパが吹き鳴らされたその様子がこの９：１から記されています。これまでと同じように神のさばきが下ったことが記され、その結果どういったことが起こるのか――。そのような書き方で９章からもヨハネは記してくれています。
まず１節に二つの神のさばきが記されています。

１．「一つの星が天から地上に落ちた」

一つ目は「**第五の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると、私は一つの星が天から地上に落ちるのを見た。**」と書かれています。「**星**」ということばがここに出て来ますが、私たちはこれまでもこのことばを見て来ました。実際に天体が地球に落ちて来るという話を６：１３や８：７でも見て来ました。ではここに書かれた「**星**」というのは同じように天体の話かというと、そうではありません。なぜそう言い切れるかというと、この後、その星に「**底知れぬ穴を開くかぎ**」が与えられています。ということは、その星に任務が与えられている。そのことからしてもこれが天体ではないことは明らかです。

＊「星」とはサタン

では一体だれなのか――。これは、堕落した天使だという解釈をする人もいます。しかし、恐らくはサタンです。この「**落ち**」たという動詞は完了形で記されているので、もう既に起こった出来事です。もう既に起こってしまった出来事をヨハネはここで記してくれています。つまりサタンは罪を犯した時にもう既に天から落ち、そしてまたもう一回天から落ちる話がここに出て来ます。
少し整理すると、イザヤ１４：１２に、「**暁の子、明けの明星よ。どうしてあなたは天から落ちたのか。**」と記されています。これがサタンが最初に罪を犯した時に天から落ちた時の話です。サタンも私たちと同じように被造物で、神によって造られた天使です。ところがその天使が罪を犯すことによって、天から落とされたことがここに記されています。イエス様はその時のことを弟子たちにルカ１０：１８で「**わたしが見ていると、サタンが、いなずまのように天から落ちました。**」と言われました。サタンが罪を犯した時に天から落とされたことは確かに聖書が教えます。

＊　サタンの働き：天での告発者

ではだからと言って、サタンは神の前に立つことができなかったのかというと、そうではありません。サタンは何度か神の前に立っています。例えばヨブ１章でサタンはヨブに関して神の前に立ってある提案をしています。ヨブ１：６「**ある日、神の子らが主の前に来て立ったとき、**」、この「**神の子ら**」というのは罪を犯していない天使たちの話です。彼らは神の周りにいるわけですが、その天使たちが神の前に立っている時に、「**サタンも来てその中に**」立ったと教えます。ですから、サタンは罪を犯した時に確かに神の前から追われましたが、その後神の前に立つことが許されていたようです。こんなやり取りがなされています。ヨブ１：７「**主はサタンに仰せられた。『おまえはどこから来たのか。』サタンは主に答えて言った。『地を行き巡り、そこを歩き回って来ました。』**」とあります。つまりサタンがこういう働きをしているということです。サタンは地上にあって告発する人々を探しています。また自分が影響を及ぼす人々を探し回っているのです。サタンは、我々よりも力があるし、知恵があります。我々クリスチャンのうちにも働いて、我々クリスチャンが神に喜ばれる生き方をするのではなくて、世的な生き方をして、神の栄光を汚すような選択をするように誘惑し続けています。そして我々が罪を犯すならば、サタンは神の前であなたや私のことを訴え続けていると言います。そういう働きをしているとサタン自身が主なる神に対して告白しています。
ですからペテロはＩペテロ５：８で「**身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。**」と言いました。よく似た表現です。サタンが歩き回って、クリスチャンであるあなたのうちに働き、あなたを間違った方向に導

こうとします。クリスチャンでないあなたのうちに働いて、あなたが間違ってもこの救いに与らないように誘惑し続けます。だからクリスチャンである私たちは注意していなければいけないというのがここでペテロが教えることです。

＊　サタンが天から落ちるということ

さて、きょうのテキストを見ると、「**一つの星が天から地上に落ちるのを見た。**」、最初にもお話ししたように、ここで記されている出来事は、先ほどイザヤ書で見たサタンが最初に罪を犯すことによって神の前から追い出されたという出来事ではどうもなさそうです。なぜそう言い切れるかというと、１ページ進んで１２：７を見ると、「**さて、天に戦いが起こって、ミカエルと彼の使いたちは、竜と戦った。それで、竜とその使いたちは応戦したが、：8 勝つことができず、天にはもはや彼らのいる場所がなくなった。：9 こうして、この巨大な竜、すなわち、悪魔とか、サタンとか呼ばれて、全世界を惑わす、あの古い蛇は投げ落とされた。彼は地上に投げ落とされ、彼の使いどもも彼とともに投げ落とされた。**」と、天における戦いの話が出て来ます。この「**ミカエル**」というのは御使いの中で最も位の高い天使のひとりですが、天でサタンたちとミカエルとその使いたちとの間に争いが、戦いがあって、サタンたちが敗北した様子が書かれています。そして彼らは地上の落とされたと記されています。

恐らくこの９章のテキストの中で、「**一つの星が天から地上に落ち**」たとあるのは、今１２章で見た出来事をヨハネは記しているのだと思います。元ダラス神学校の学長であったジョン・ワルブード師は、「この神の行為は、恐らく大患難時代の初めになされるのであり、サタンがそれまで続けてきた、天における主にある兄弟たちを非難することをやめさせるためになされるのである。」と言います。今私たちが学び始めている９章は患難時代の後半、大患難という時代に起こる話です。先ほども言ったように、それまでサタンは神の前にクリスチャンを日夜告発する者でした。このクリスチャンはこんな罪を犯しているではないですか、こんなことをしているではないですかと神の前で訴え続けている様子が確かに黙示録１２：１０で記されています。「**私たちの兄弟たちの告発者、日夜彼らを私たちの神の御前で訴えている者が投げ落とされた**」と。ところがこのミカエルたちとの戦いに敗北することによって、彼はそこから落とされ、恐らくそれ以降サタンは二度と神の前に立つことが許されなくなったことが９：１に記されていることであろうと。ですから、この「**第五の御使いがラッパを吹き鳴らし**」、さばきが起こるわけですが、その最初はサタンが天から地上に落ちるということでした。

２．「星には底知れぬ穴を開くかぎが与えられた」

二つ目は「**その星には底知れぬ穴を開くかぎが与えられた。**」とあります。つまりサタンに「**かぎ**」が与えられたと言うのです。

＊　「底知れぬ穴」

ここに出て来る「**底知れぬ穴**」というのは、実は新約聖書の中に９回出て来ます。その中の７回は黙示録に出て来ます。（９：２、１１：７、１７：８、２０：１、３）黙示録以外ではローマ１０：７やルカ８：３１に出て来ます。このことばは常に監禁された悪霊たちのいるところとして記されています。悪霊たちが監禁されているところがこの「**底知れぬ穴**」なのです。今サタンはその中で監禁されていません。しかし後の千年王国の間、サタンもそこで監禁されます。黙示録２０：１－３に「**また私は、御使いが底知れぬ所のかぎと大きな鎖とを手に持って、天から下って来るのを見た。彼は、悪魔でありサタンである竜、あの古い蛇を捕え、これを千年の間縛って、底知れぬ所に投げ込んで、そこを閉じ、その上に封印して、千年の終わるまでは、それが諸国の民を惑わすことのないようにした。サタンは、そのあとでしばらくの間、解き放されなければならない。**」とあります。イエス・キリストが地上に帰って来られた後、千年間はサタンはこの「**底知れぬ穴**」で監禁されます。千年王国の後でしばらくの間だけ、そこからまた解放されることが書かれています。ですから最初にもお話したように、サタンは今、悪霊たちとともにイエス様を信じている私たちを惑わし続けるし、誘惑し続けるし、イエス様を信じていない人々を同じように惑わし続けています。

さて、この「**底知れぬ穴**」に監禁されている悪霊たちのことについて少し考えてみましょう。Ⅱペテロ２：４に「**神は、罪を犯した御使いたちを、容赦せず、地獄に引き渡し、さばきの時まで暗やみの穴の中に閉じ込めてしまわれました。**」とあります。先ほど悪霊たちが監禁されている「**底知れぬ穴**」というものが存在していることを見て来ました。ではどんな悪霊たちなのかというと、ここに「**罪を犯した御使いたち**」とあります。そしてここには「**地獄に引き渡し、**」ということばが出て来ます。日本語ではこう訳されていますが、これは一つのギリシャ語です。ここで使われているギリシャ語の名詞形は「タルタロス」ということばです。それを日本語で「**地獄に引き渡し、**」と訳したのです。これは動詞形ですから「タータロー」と訳しているのですが、ペテロがこのことばをどうして使ったのかというと、古代ギリシャ人が死後の人間が行く一番低い場所のことを「タルタロス」と呼んで、このことばを使っていたのです。まただれでもではなくて、特に悪い人々、悪人が死んでから行く場所のことを彼らは「タルタロス」と呼んでいました。この場所は、さばかれて永遠の火の池に投げ込まれるまで監禁されているところなのです。

ペテロは読者たちのために古代ギリシャの神話からあえて彼らがわかるようにとこのことばを引用しているのです。そこで最後のさばきを待つわけです。

ここはその「タルタロス」という名前のついた場所であって、今罪を犯した悪霊たち、全部ではなくてある一部の悪霊たちだけはこの穴の中で監禁されているのです。そうでない悪霊たちもいます。レオン・モリスという神学者は「この場所は罰を受けるところではなく、刑罰の場所は火の池として描かれている。」と言っています。確かに黙示録２０章の中にはそのように記されています。ですから今監禁されているところから彼らはさばきに引き出され、さばきの後、永遠の火の池に投げ込まれるわけです。

＊　監禁されている悪霊

さて、どんな悪霊がここに監禁されているのか、またなぜ彼らがそこに監禁されているのかです。ユダの手紙６節を開いてください。「**また、主は、自分の領域を守らず、自分のおるべき所を捨てた御使いたちを、大いなる日のさばきのために、永遠の束縛をもって、暗やみの下に閉じ込められました。**」と書いてあります。これは地獄ではなく、あるところに監禁されているという話です。では彼らはどんな罪で監禁されたのかというと、「**自分の領域を守らず、自分のおるべき所を捨てた御使い**」と書いてあります。これがこの天使たちの罪だったのです。創世記６：１－２に「**さて、人が地上にふえ始め、彼らに娘たちが生まれたとき、神の子らは、人の娘たちが、いかにも美しいのを見て、その中から好きな者を選んで、自分たちの妻とした。**」と記されています。つまり天使たちが自分たちの領域を守ることなく、人の娘たちに対してこのような思いを抱いて不品行を働いたという話です。だからユダは「**自分の領域を守らず、自分のおるべき所を捨てた**」と教えたのです。天使たちでありながらこのような罪を犯した結果、彼らはこの穴の中に閉じ込められました。しかし、その罪を犯していない悪霊たちもいて、彼らは今自由にサタンの指示どおりに働きをしているわけです。

もう一カ所Ｉペテロ３：１９を見てください。主イエス・キリストが十字架で私たちの罪のために身代わりとなって死んでくださった後、よみがえるまでの三日間イエス様がなしておられた働きの一つがこの中に記されています。キリストはどこへ行ったのかというと、「**キリストは捕われの霊たちのところに行ってをみことばを宣べられたのです。**」とあります。「**捕われの霊**」の話が出て来ます。特別な罪を犯した悪霊たちは捕えられ、監禁されているのです。この訳によれば、イエス様はそこに行って「**みことばを宣べられた**」とみことばが我々に教えてくれます。多分皆さんがこの箇所を読むと、ではイエス様はそこに行って悪霊たちに何かみことばを語った、どんなみことばを語ったのだろう、まさか福音を語ったのではないでしょうねと思われるかもしれません。福音を語っていません。もっと言えば、みことばも語っていません。というのは、実はこの箇所はこんなふうに訳されていますが、ギリシャ語の聖書の中には「**みことば**」ということばは出て来ません。これは日本語で補われているのです。ではここで使われていることばはどういうことばかというと、「言い広める」、「あることを宣言する」、「公布する」とか「布告する」という意味のことばです。昔、テレビなどがない時に、ある出来事が起こったら、街角に立ってその出来事を人々に布告して公にするわけです。こういうことがあったとか、こういうことが起こったと。今イギリスで王室にお子さんが誕生した時に、お子さんが生まれたと皆の前で明らかにする人がいます。ここで使われていることばはそういうことばです。つまりＩペテロ３：１９が教えることは、イエス様が捕われの悪霊たちのところへ行って、何か聖書のことばを語ったのではないのです。イエス様はそこへ行って、ご自分がその罪に勝利された栄光の神であること、唯一の救い主であることを明らかにされたのです。ご自分がだれであるかを。それがイエス様がなさったわざだとペテロが教えています。残念ながらこういうふうに訳されてしまっているので、誤解を生むかもしれませんが、イエス様がここでなさったことは、ご自分が罪に勝利された救い主であること、救いをもたらすことのできる約束の救世主であることを公にされたということです。

＊　神によって与えられた「かぎ」でサタンがなすこと

さて、きょうのテキストに戻って、サタンに対して９：１「**底知れぬ穴を開くかぎが与えられた。**」とあります。その「**かぎ**」もって扉を開くわけです。その後何が起こるのか――。またその「**かぎ**」によって一体何をしようとするのかというと、サタンは彼とともにいる悪霊たち、またここに閉じ込められている悪霊たちをみんな一緒に集めて神に逆らうことをしようとします。最後の最後です。そこに向かって、サタンは、自分と働いている悪霊たちだけではない、ここに閉じ込められている悪霊までもそこから解放することによって、一緒に神に逆らおうとするのです。

そのことがここに書かれているのですが、非常に興味深いのはその「**かぎ**」を与えたのは神様だということです。このことを通して神はご自身の栄光を現わされるのです。この箇所で書かれていることは、神が罪を犯しているのではないのです。でもそのようなサタンの働きをもお用いになってご自身の栄光を現わされる、そのようなお方だということです。つまりこの１節が私たちに教えてくれているのは、この「**星**」である悪魔、サタンには独立した権威がないということです。どんなに彼が賢くて、どんな

に彼に力があったとしても、彼は神になることはできないのです。あくまで主なる神様に主権があるのです。この方のみこころに基づいてすべてのことが導かれるのです。それを考えるだけで我々の心が喜びません？どんなに悪魔が神に立ち向かおうと、彼は常に敗北者なのです。勝利者は神なのです。そして神はご自身の知恵をもってすべてのことを用いて神ご自身の栄光を現わされる方です。

Ｂ．その結果　２－１１節

１．「太陽も空も、この穴の煙によって暗くなった。」　２節

さて、１節にさばきが記されていて、２－１１節にはその結果が出て来ます。まず２節を見ると「**その星が、底知れぬ穴を開くと、穴から大きな炉の煙のような煙が立ち上り、太陽も空も、この穴の煙によって暗くなった。**」とあります。

・　その「煙」とは？

この「**煙**」ということばを聞くと、特に黙示録において「**煙**」というのはきよいものと関係があります。例えば８：４や１５：８を見ると、「**煙**」は神様のきよさと関係しています。また多くの場合は神のさばきや破滅、苦痛というものと関連しています。９：１７、１８；１８：９、１８や１９：３にそのことが記されています。

また「**煙**」というと、あのソドムにおける神様のさばきを思い出します。創世記１９：２８「**彼がソドムとゴモラのほう、それに低地の全地方を見おろすと、見よ、まるでかまどの煙のようにその地の煙が立ち上っていた。**」とありました。神のさばきがなされ、そしてその町から「**煙が立ち上っていた**」と。大変な神様のさばきです。きょうのテキストを見ると、「**底知れぬ穴を開くと**」、その中から「**煙が立ち上**」って来るとあります。そしてその結果「**太陽も空も……暗くなっ**」てしまったと書かれています。マッカーサー先生は「穴の中からの汚れがこの世界を汚染して行く様子が述べられている」と言われます。なぜならその穴の中にいたのは汚れた御使いたちです。そこが開かれてこの御使いたちが出て来ることによって、この世界を汚染して行く様子がここに記されているのだと。また、ジョン・ワルブード師は「この穴の中に噴出しようと含まれていたものが、空中を汚染して、太陽が暗くなった」、そういう意味ではないかと言われます。恐らくここで言っていることは、この確かに汚れた御使いたちがそこから出て来ることによって、その悪い影響が全世界に及んでいるということです。

大変な時代がやって来るわけです。地震は頻繁に起こり、火山の爆発があり、そして星によって海の三分の一の生き物が死んでしまい、いろいろな悪臭が放たれ、そして同じように川や泉にそのような星が落ちて苦くなって飲めなくなって、それを飲む者が死んでしまうと書かれています。大変な世界です。そしてそれにとどまることなく、こうしてこの悪がそこから出て来ることによって全世界が暗くなってしまったと。大変な時代が訪れるということを聖書は預言しています。もっといえば近未来です。何百年先の話をしているのではないのです。我々は非常に近いところにそのさばきが迫っていることを知っています。

２．「いなご」について　３－１１節

さて、３節「**その煙の中から、いなごが地上に出て来た。**」とあります。「**いなご**」の話です。「**いなご**」と聞くと、あのエジプトに神様がもたらせた１０のわざわいの第八番目でした。出エジプト記１０章に出て来ます。大変な被害をもたらしたわけです。でもここで描かれている「**いなご**」は普通のいなごでないことは明らかです。というのは１１節を見ると、この「**いなご**」にはリーダー、王がいるのです。またこの「**いなご**」は大変な力を持っています。３節に「**彼らには、地のさそりの持つような力が与えられた。**」と書いてあります。これを見るだけでも、この「**いなご**」は普通のいなごでないことは明らかです。では一体この「**いなご**」とは何か――。これは悪霊たちです。彼らはいなごに非常によく似ていると言うのです。ヨハネはその情景を見てそれを書き写すわけです。ですから彼が見ていてよくわからないけれども、こういうものに見えるとか、こういうものによく似ていると出来事を記してくれているのです。読者に伝えるために。天使たちですから、当然からだを持っていないので我々は見ることができない。この「**いなご**」によく似ているというのは、その目に見える形を取って悪霊たちがその穴から出て来る様子を表しています。

さてこの悪霊たちについて、今から四つのことを見て行きます。

１）彼らの力　３節

まず最初に彼らの力です。３節に「**彼らには、地のさそりの持つような力が与えられた。**」とあります。それはさそりと同様に痛みを与えることができるということです。私が１９７７年にアメリカのテキサスのクリスチャンのキャンプ場でカウンセラーをしていた時に、私は毎朝子どもたちに「起きて靴を履く前に必ず靴の中を見なさい」と告げていました。数センチのさそりが靴の中に入っていることが多いのです。さそりもいろいろな種類がいて、毒を持ったさそりは砂漠の地方に行かないといないので、毒はないのですが、刺された人間に聞くと「蜂に刺されたように大変な痛みがある」と。この「**いなご**」の

ような存在、この悪霊たちはさそりの持つような大変な痛みをもたらすような力を持っていた。それがまず最初に教えられていることです。

２）彼らの使命　４－６節

二つ目、４－６節を見ると、この悪霊たちが与えられていた使命が書かれています。

（１）使命：人間を苦しめること　４節

４節「**そして彼らは、地の草やすべての青草や、すべての木には害を加えないで、**」とあります。これが普通のいなごと違うところです。本来のいなごは植物に害を与えるものです。ところがこのいなごはそういうものに害を与えないで、「**ただ、額に神の印を押されていない人間にだけ害を加えるように言い渡された。**」とあります。つまり彼らが出て行く使命は人間に害を及ぼすためです。でもすべての人間ではなくて、「**額に神の印を押されていない人**」たち、つまりクリスチャンでない人たちに対して害を与えるようにと、それが彼らの使命なのです。つまりクリスチャンたちにはこの害は及ばないということです。エジプトにおけるさまざまなわざわいの時に、エジプトの人々にだけ害が及び、イスラエルの人々は守られていました。ここでも神はクリスチャンたちを守っているのです。その額に神の印が押されているクリスチャンたちを守ってくださる。でもそうでない人々に対して、この大変な害が及ぶのだと。ここを見ても神様の命令にこの被造物たちは従っています。たとえ悪霊であっても。またここで、主権者が一体だれなのかが明らかに示されています。すべての人に害を与えることを許されていたわけではありませんでした。

（２）活動の期間　５節

この悪霊たちはどれだけの期間活動が許されていたのか。５節「**しかし、人間を殺すことは許されず、ただ五か月の間苦しめることだけが許された。**」とあります。人を殺してはならないというのです。そしてその苦しみをイエス様を信じておられない人間に与える期間は５カ月と定められています。なぜ５カ月かというと、これはいなごの一般的な寿命が５月から９月の５カ月だと言われています。それで恐らく５カ月と決められたのかもしれません。この「**人間を殺すことは許されず**」というのを見ると、ここにも神様のあわれみというものが出ています。神はこの大変な苦しみを経験しているこの人たちにまだ救いの機会を与えてくださっているということです。聖書を通して我々が何度も教えられるのは、私たちの神は憐れみの神だということです。いつでもこうして神の救いを受け入れていない人たち、まだ救われていない人たちに対して神は救いの手を差し伸べておられるということです。彼らは大変な苦しみを経験しますが、悪霊たちは彼らを殺すことは許されていなかった。神はひとりでも多くの罪人が悔い改めに臨むことを望んでおられた。

（３）苦痛　５ｂ－６節

さて、苦痛についてこうあります。５節の後半と６節を見ると、「**その与えた苦痛は、さそりが人を刺したときのような苦痛であった。その期間には、人々は死を求めるが、**」と書いてあります。つまり大変な苦しみがあることを今見て来ました。その苦しみがどんな苦しみであったかというと、６節「**人々は死を求める**」と書いてあります。それほど辛いのです。余りの痛みで、こんな痛みだったら死んだ方がましだという思いを抱くような痛みが彼らの上に及ぶということです。ところがその後、「**どうしても見いだせず、死を願うが、死が彼らから逃げて行くのである。**」とあります。彼らの大変な悲劇というのは自分で死ぬことができないということです。この「**見いだ**」すということばに二つの否定語がついています。それは絶対にあり得ない時にそういう書き方をします。ですから自分で死を「**見いだ**」すこと、自分で死ぬことが絶対にあり得ないという話です。後半の「**死が彼らから逃げて行く**」の主語は「**死**」です。「**死**」の方がその人から逃げて行くという話です。しかもこの「**逃げて行く**」という動詞は現在形です。つまり「**死**」が彼らから継続して逃げ続けて行く様子です。大変なことが約束されているのです。死にたくなるような苦痛でも死ぬことはできず、「**死が彼らから逃げて行く**」と。それに追いつくこともできないし、それを手に入れることもできない、大変な苦しみを経験するという話です。

３）彼らの特徴　７－１０節

三つ目は彼らの特徴が７－１０節に八つ記されています。

（１）「馬に似ていた」　７節

一つ目、７節「**そのいなごの形は、出陣の用意の整った馬に似ていた。**」と書いてあります。馬だと言っているのではありません。「**馬に似てい**」るという話です。「似ている」とか「～のような」という前置詞は黙示録の中に７１回も出て来ます。先ほども説明したように、ヨハネは自分の前で示されている幻をどう説明していいかわからない、そのことばが見つからない。そこで彼は見たままを一生懸命描写するのです。だから「～のような」と読者たちがわかることばを選びながら記しているわけです。「**馬に似てい**」ると書いています。しかも「**出陣の用意の整った馬に似てい**」ると書いてあります。これは戦争のための備えをした状態です。今でもすぐに戦いに出て行けるという様子です。

（２）「頭に金の冠のようなものを着けていた」　７節

そして二つ目、その後に「**頭に金の冠のようなものを着け**」と書かれています。この「**冠**」というのは勝利者の冠です。恐らくこのいなご、悪霊が常に勝利をおさめることを言っているのでしょう。すなわちだれもこのいなごの攻撃を打ち負かすことができない、いなごの与える害からだれも逃れることができない。そういったことを言っているのでしょう。

（３）「顔は人間の顔のようであった」　７節

三つ目は顔の話です。「**顔は人間の顔のようであった。**」と。つまりこのいなごには知恵があって、彼らは理性的な生き物であったということです。人間が物を考えたりすることができるように、この生き物もそうであったと。だからただの虫ではなかったのです。

（４）「女の髪のような毛があった」　８節

８節には「**また女の髪のような毛があり、**」とあります。マッカーサー先生はこれは恐らく彼らの人を引き付ける魅力を強調していると言われます。なぜかというと女性の魅力というのは髪です。それによって人を魅了するように、それによっていなごは人々を滅びへと誘惑して行くということです。

（５）「歯は、獅子の歯のようであった」　８節

第５番目に出て来るのは、この生き物の歯の話です。「**歯は、ししの歯のようであった。**」と。彼らはライオンよりも獰猛で力があり、破壊的な存在であると。

（６）「鉄の胸当てのような胸当てを着けていた」　９節

そして第六番目に出て来るのは、９節「**また、鉄の胸当てのような胸当てを着け**」とあります。普通よろいは自分のからだを守るためのものです。ここでヨハネは、この悪霊たちに抵抗することができないこと、彼らは「**鉄の胸当て**」で覆われていて打ち破ることができない存在だと教えているのです。

（７）「翼を持っていた」　１０節

そして第七番目は、「**その翼の音は、多くの馬に引かれた戦車が、戦いに馳せつけるときの響きのようであった。**」と。翼を持っていたと書いてあります。そしてその翼の音はたくさんの「**馬に引かれた戦車が、戦いに馳せつけるときの**」音のようだったと。あっという間に戦場にやって来るのです。ですからそのことをもって彼らのすばやい攻撃を防ぐことも、その攻撃から逃れることもだれにもできないと。恐らくその様子を記したのでしょう。

（８）「さそりのような尾と針とを持っていた」　１０節

そして最後の第八番目が１０節に出て来ます。「**そのうえ彼らは、さそりのような尾と針とを持っており、尾には、五か月間人間に害を加える力があった。**」と。３節、５節、１０節にも「**さそり**」というのが出て来て、３回繰り返されています。恐らくこれは「**底知れぬ穴**」から出て来た悪霊たちの務めを強調しているのでしょう。彼らは人間、もっと正確に言えば、主イエス・キリストを信じていない人たちに大変な苦痛をもたらす。それが彼らの務めであると。

４）彼らの王　１１節

そして第四番目に彼らの王がだれなのか書かれています。１１節「**彼らは、底知れぬ所の御使いを王にいただいている。彼の名はヘブル語でアバドンといい、ギリシヤ語でアポリュオンという。**」と二つの名前が出て来ますが同じ意味です。この「**アバドン**」というのはヘブル語で滅びとか滅亡とか廃墟、そう言った意味を持ったことばです。「**アポリュオン**」というのはギリシャ語で破壊や破滅を意味しています。ですからどちらのことばも滅ぼすものという意味があるのです。なぜこういうことが書かれているかというと、これがこの悪霊たちの王であり、この王はサタンではないです。なぜかというと、サタンはこの穴の中にいないのです。ですから恐らくここの王たちはサタンに仕える悪霊の中で非常に高い位についている存在で、この王の名前がここに記されているのは、この王もそうだし、仕える悪霊たちもそう、そしてこの王が仕えるサタンもみんな同じ目的を持っていることを明らかにするためです。彼らが望んでいることは人々を滅ぼすことしかないと言うのです。自分たちが滅びるゆえにひとりでも多くの未信者を誘惑し、彼らが同様に滅びるようにと。そのような働きをする者たちだということがこの箇所が教えることです。

ジョン・ワルブード師はこう言います。「これがサタンの性格であり、彼の仲間となる邪悪な堕落した天使も同様である。現代社会においてはサタンはしばしば光の天使として現れ、宗教的なよい役割をするが、ここではその仮面ははぎ取られ、その悪の本性を現わすのである。サタンと悪霊は人々の魂を滅ぼすものとして、また苦しみのみをもたらすものとして見られるのである。一体サタンとはどういう存在なのか、そのサタンに仕える悪霊たちとは一体何をなそうとしているのか、それがここに記されている」と。彼らが考えていることは皆さんの幸せではないのです。まだイエス様の救いをお受けになっておられない方がいるならば、サタンはあなたを誘惑し、惑わし、だまし、サタンに従い続けることが幸せを得る方法であると誘惑するでしょう。それは大嘘です。サタンは自分が滅びるのです。悪霊たち

も滅びるのです。そこであなたを道連れにしようとしているにすぎない。彼はあなたの幸せなんか考えていません。彼はあなたを道連れにしたいだけです。それがこの王の名前であると。滅びるものであると。ゆえにすべての人を滅ぼそうとしている者なのだと。

警告：１２節

　そして最後、１２節「**第一のわざわいは過ぎ去った。見よ。この後なお二つのわざわいが来る。**」と。これで終わりではなかったのです。この後まだ二つのわざわいが続いて来るのです。

　大変な時代になることが確かに記されています。クリスチャンの皆さん、これが私たちに聖書が教える患難時代の後半の出来事です。確かに私たちは救いに与っていますから、それに臨むことはありません。でも私たちの愛する者たちがこの救いに与っていなければ、こういうところを彼らは通って行くのです。ひょっとしたらその間に信仰に至るかもしれない。でも信仰に至るというのは殉教を意味していました。大変な苦しみがあると。だから今チャンスのあるうちに、私たちはしっかりとこの福音を宣べ伝え続けて行くことです。祈りながら、機会を探りながら、この福音のメッセージを語り続けて行くことです。大変な時代が来るのだと、大変な時が訪れるのだということをこうしてみことばは警告してくれています。そのことを知った私たちには当然責任が生じています。どうぞ出て行って神の真理を語ってください。そしてまだこの救いのチャンスがあるうちに、この救いに与るようにと人々に救いのメッセージを語り続けてください。

《考えましょう》

１．「星」はだれのことを指していましたか？
２．「底知れぬ穴」について説明してください。
３．「いなご」について説明してください。
４．なぜ人々は「死」を求めるのでしょう？その理由を記してください。